

沖縄における窯業史研究の到達点と課題

- 窯業開始期を中心に -

池田 榮史

1、はじめに

沖縄における陶器生産について、18世紀はじめに編纂された『琉球国由来記』（註1）には島津氏による琉球侵攻の後、薩摩に連行されていた佐敷王子（後の尚豊王）が萬曆44（1616）年に琉球へ戻る際、薩摩から朝鮮人陶工3人（安一官・安三官・張一六）を連れ帰ったことに始まると伝えている。それから400年あまりが経過した現在、沖縄の焼物は「壺屋焼」の名称で全国的に知られるようになった。これには昭和初期に沖縄を訪れた民芸運動に関わる人々が壺屋焼を高く評価したことが大きく影響している。これを受け、那覇市は平成10（1998）年に壺屋焼と沖縄の窯業史を主題として取り扱う壺屋焼物博物館を設けた。壺屋焼物博物館は壺屋焼や沖縄の窯業史についてのさまざまな調査研究を行なうとともに、博物館が立地する那覇市壺屋地区に残された焼物に関わる文化財や街並の情報を発信する拠点施設の役割を担っている。壺屋焼物博物館の活動によって壺屋焼や沖縄窯業史に関わる情報の集約と発信が進んでおり、その内容は社会的にも知られつつある。しかし、未だ明らかになっていない課題も多い。

このこともあり、壺屋焼物博物館では平成23（2011）年に沖縄県立博物館・美術館と協力して、合同企画展「琉球陶器の来た道」を開催し、沖縄の焼物の歴史やこれまでに作られてきた製品の魅力を知らしめる試みを行なうとともに、企画展に関する図録を作成して、現段階での研究状況の確認を行なった（那覇市立壺屋焼物博物館2011）。また、陶器生産のはじまりとされた萬曆44（1616）年から400年経過した平成28（2016）年には、壺屋焼物博物館単独の特別展「1616年～琉球陶始400年～」を計画し、その一環として関連シンポジウム「移動する人と技術 東アジア窯業技術の伝播と定着」を開催した。

合同企画展や特別展およびシンポジウムの目的は壺屋焼を含む沖縄の陶器についての研究状況を確認した上で、今後取り組むべき問題点を明らかにすることである。中でも、シンポジウムでは沖縄における陶器生産開始段階の技術や製品についての具体的な解明に焦点を絞ることとした。このシンポジウムに筆者は討論の進行役として参加したこともあり、この課題を取り上げた背景についてまとめておきたい。

いけだ・よしふみ：（壺屋焼物博物館運営評議会委員）

2、沖繩における陶器生産のはじまりをめぐる研究の開始

沖繩における陶器生産のはじまりをめぐる研究は、民芸運動に関わる人々が沖繩の焼物に関心を向けたことによって本格化する。民芸運動を主導した柳宗悦らは昭和13～15（1938～40）年にかけて沖繩を訪れ、当時の壺屋で行なわれていた陶器生産の実態を観察するとともに、沖繩の窯業史に関わる情報の収集を行なった。その成果は昭和17（1942）年に刊行された「琉球の陶器」（『民芸叢書』第4篇）にまとめられている。同書には柳による「現在の壺屋とその仕事」の他、同行した濱田庄司による「壺屋の仕事」、河合寛次郎による「壺屋と上焼」、さらに地元の研究者であった比嘉常景による「琉球焼物考」、山里永吉による「琉球の陶業史」などが採録されている。本書によって当時の壺屋で行なわれていた焼物生産の様子がうかがい知れるとともに、壺屋焼の技術や歴史に対する理解状況について確認することができる。中でも、比嘉が行なった琉球王府作成記録や士族の家系に残る『家譜』資料などに残る窯業史に係る文字記録の検討および山里が行なった文字記録に対する考証と伝世陶器資料の検討を含めた沖繩窯業史の理解論の提示は、その後の研究の基礎となった。

その中の山里の論考によれば、琉球（沖繩）の陶器はタイやベトナム、南中国などの南方系陶器の影響を受けて始まり、17世紀初頭の朝鮮陶工の来琉、17世紀後半の中国系赤絵技術の導入、18世紀前半の薩摩系陶器技術の導入を経て、今日の壺屋焼に繋がる作風が完成することとなる。山里が琉球（沖繩）陶器の始まりに位置付けた南方系陶器の影響とは、昭和16（1941）年に東恩納寛惇が著した『黎明期の海外交通史』（東恩納1941）に採録した「泡盛雑考」の中で、15世紀後半に伝わったとした泡盛蒸留技法に触発されている。東恩納の所論を受けて、山里は蒸留技術とともに泡盛の蒸留および貯蔵に必要な壺・甕を製作する陶器生産技術が琉球へ導入され、これに17世紀初頭に来琉した朝鮮陶工の陶器製作技術が加わって、本格的な琉球（沖繩）での陶器生産が確立したと考えたのである（前出、山里1942および山里1963）。

比嘉や山里による沖繩窯業史の枠組みは米軍統治時期を経て、沖繩の施政権が米国から日本に返還された昭和47（1972）年頃までの沖繩窯業史についての基本的な理解となった。なお、この時期の日本本土では陶芸ブームが起こっており、各地の焼物に関する図書の出版が行なわれ、その一環として沖繩の陶器に関する図録も複数刊行されている（註2）。また、その後の沖繩では各地に残る窯跡への関心が高まり、窯跡採集資料を踏まえた論考の発表も行なわれ始めた（註3）。

このような中で、沖繩の窯業史研究に大きな転換をもたらしたのは、昭和61（1986）年から開始された沖繩県庁舎改築工事に伴う発掘調査である。沖繩県庁舎の敷地は近世期にまとめられたいくつかの文献記録に残る涌田窯跡の比定地であったが、一帯は沖繩戦によって焼土となった上に、戦後は琉球政府庁舎が建築されたこともあり、窯跡はほとんど破壊されたと考えられていた。しかし、改築工事に先立つ発掘調査では複数の窯跡や焼物生産に関わる施設の遺構、および大量の貿易陶磁器や沖繩産陶器、瓦、さらには製陶に関わるさまざまな遺物が検出された。中でも窯跡にはイチジク状の平面観を呈する平窯と細長い筒状の平面観を呈する単室登窯（筒窯）があり、前者では瓦と瓦質土器（陶器）、後者では焼き締め陶器を中心として瓦も焼成したことが確認された（沖繩県教育委員会1993・1995・1997・1999）。

比嘉や山里らの研究において、涌田窯跡は17世紀初頭に來琉した朝鮮陶工をはじめとして、琉球王府に仕えた士族の家系図である『家譜』資料に記された陶工の平田典通や仲村梁致元らが陶器製作に従事した場所とされていた。また、沖縄では近年まで上焼と呼ばれる施釉陶器は連房式登窯、荒焼と呼ばれる焼き締め陶器と瓦は単室登窯（筒窯）で焼成することが一般的に知られており、この点からすれば発掘調査で検出した平窯は全く予想しなかった構造の窯であった。さらに、沖縄県庁舎改築工事に先立つ発掘調査出土遺物中の貿易陶磁器には15世紀後半～16世紀代に位置付けられる明代青花があり、新たに発見された平窯の操業年代は山里らが想定していた朝鮮陶工の來琉年代である17世紀初頭ではなく、島津氏琉球侵攻以前の15世紀代まで遡る可能性も考えなければならなくなった。出土遺物である瓦質土器（陶器）の浅鉢の一つに施されていた「萬曆三十三年」（1605年）の線刻銘資料（前出、沖縄県教育委員会1993）の存在が示すように、涌田窯では朝鮮陶工の來琉年である1616年に先立って、少なくとも瓦質土器（陶器）の生産が確実に行なわれていたのである。

発掘調査終了後、涌田窯跡から検出された平窯については、発掘調査の際の検出状況や中国明代に刊行された『天工開物』に記載された窯構造との比較などが進められ、瓦を焼成した中国系の窯と理解することが通説となった。また、出土遺物である瓦および瓦製作に用いた瓦當範の分析によって、ここで製作された瓦には灰色と赤色の2種があり、17世紀から18世紀にかけて首里城などの公的建造物の屋瓦として供給されたことも明らかにされた（上原静1994）。なお、平窯では瓦とともに瓦質土器（陶器）を焼成していたことは前述した通りであり、その上限年代は「萬曆三十三年」（1605年）の紀年銘が示す年代まで確実に遡ることが共通理解となった。

ところで、沖縄県庁舎改築工事に先立つ発掘調査が行なわれる前までは、沖縄での瓦生産については文献記録の検討に基づき、少なくとも16世紀後半には開始されたと考えられていた。また、その窯跡の所在地としてはやはり文献記録（註4）に基づいて那覇市真玉橋周辺を念頭に置いていた。しかし、窯跡は発見されておらず、初期の瓦窯については文献記録以外に全く情報がない状態にあった。このこともあり、近年まで操業していた沖縄の瓦製作所においては瓦の焼成に単室登窯（筒窯）を用いていることを参考にして、漫然と単室登窯（筒窯）が沖縄における瓦生産開始段階から続く瓦窯の構造であると一般的に認識していたのである（やちむん会1979）。

しかし、平窯が検出されたことによって、16世紀後半以降の沖縄で最初に瓦を焼成した窯は涌田窯跡で検出された平窯に類似した構造であると考えられることとなった。また、16世紀後半以降に存在した平窯が瓦窯であるとするれば17世紀初頭の朝鮮陶工來琉に際して伝えられた窯の構造は平窯ではなく、同時に検出された単室登窯（筒窯）である可能性が高くなった。さらに、後に連房式登窯の築窯技術が沖縄に伝えられると、瓦窯であった平窯は次第に消滅し、瓦の焼成も単室登窯で行なわれるようになったことが推測された。すなわち、瓦と荒焼は単室登窯（筒窯）、上焼は連房式登窯で焼成するという今日まで続く沖縄の窯の使い分けは、平窯が忘れ去られる過程を経て成立したと理解できるのである（池田榮史1995）（註5）。

3、沖縄における陶器生産のはじまりをめぐる研究の深化

沖縄県庁舎改築工事に先立つ発掘調査での平窯や単室登窯（筒窯）の確認は沖縄における窯業史研究の見直しの気運を醸成した。新たに見つかった平窯をはじめとして、単室登窯（筒窯）、連房式登窯については、それぞれの窯構造の導入過程と操業年代、そこで焼成された製品群である瓦、瓦質土器（陶器）、荒焼（焼き締め陶器）、上焼（施釉陶器）それぞれの製作技術や器種、器形、装飾意匠、加飾技法の変化の過程など、さまざまな方面での検討が考古学研究を中心として進められた。

瓦については上原静（1994・2007・2008）や石井龍太（2007・2008）による検討が行なわれ、浦田窯跡で検出された平窯で焼成された瓦は沖縄で明朝系瓦と呼ばれる一群であり、平瓦は桶巻4枚分割技法、丸瓦は模骨巻2枚分割技法で製作され、その確実な製品は17世紀前半に位置付けられることが明らかにされた。しかし、これまでの文献記録研究では16世紀後半とされてきた瓦生産開始期の製品の内容を実際の瓦資料によって明らかにするには至っていない。

これについて、沖縄の遺跡から出土する瓦質土器（陶器）の検討を行なった瀬戸哲也は、沖縄の遺跡からは14世紀後半以降に生産がはじまった日本本土産の瓦質土器（陶器）が出土することに注目するとともに、沖縄でも茶道具や仏具的性格をもつ瓦質土器（陶器）の生産が少なくとも16世紀後半に始まっていた可能性を指摘した（瀬戸2004a・2004b・2009）。また、石井龍太は沖縄で生産した16世紀後半の瓦質土器（陶器）の一つである植木鉢の存在に注目し、これが17世紀以降の沖縄産焼き締め陶器（荒焼）や薩摩焼陶器製品の製作に際して模倣された可能性を提起した（石井2009）。

上原や石井、瀬戸らによる検討において、沖縄における瓦生産の確実な上限年代は17世紀前半である。しかし、文献記録や遺跡から出土するその他の遺物の内容からすれば、瓦質土器（陶器）を含む瓦生産の上限は16世紀後半に遡る可能性が高いこととなる。にもかかわらず、前述したように現状では発掘調査資料によって明確な操業の上限年代を確定する遺物を比定できていない。ただし、その中であつてもこれらの製品を焼成した窯は浦田窯跡で検出された平窯と同様の構造を持つ窯であることは衆目の一致するところである。

一方、この瓦質土器（陶器）について新垣力は沖縄産焼き締め陶器との関係に着目している。新垣は浦田窯跡で出土した無釉の焼き締め陶器の一群を初期無釉陶器と呼び、これが後の荒焼に発展すると考えている。また、新垣の言う初期無釉陶器と瓦質土器（陶器）の間には植木鉢や播鉢など器形が似通った器種が複数みられるという。このことは瓦質陶器（土器）と初期無釉陶器の間で器形の模倣が行なわれたことを暗示しており、新垣は初期無釉陶器（無釉の焼き締め陶器）が瓦質土器（陶器）の要素を取り入れた可能性を考えている（新垣2000・2013）。そして、このような現象が起る背景として、薩摩からの朝鮮陶工の來琉を契機として朝鮮陶工による製陶技術がもたらされ、それまで瓦と瓦質土器（陶器）を生産していた沖縄の窯業技術との間に融合が生じ、その結果として初期無釉陶器（無釉焼き締め陶器）の器種と器形が形成されたとするのである。なお、初期無釉陶器（無釉焼き締め陶器）は粘土紐（帯）輪積みと叩き技法を用いて製作されており、後の上焼に見られるロクロ回転を利用した水挽きやケズリなどの製作技法は採用されていない点に特徴がある。初期無釉陶器（無釉焼き締め陶器）を焼成した窯について、新垣は当然ながら朝鮮陶工によって伝えられたと推測される浦田窯跡

で検出された単室登窯（筒窯）であると考えている。

その後、涌田窯跡では現在の壺屋焼で上焼と呼ぶ施釉陶器の生産も開始されたと考えられ、これについては筆者も含めて初期の施釉陶器である灰釉碗の存在に着目している（註3文献、知念ほか1988、池田ほか1991）。灰釉碗はロクロ整形によって作り出した碗の口縁部内外面のみに透明釉を施した製品に代表される。高台部分と見込み内底部は露胎となり、一部には口縁部外面の透明釉下に鉄釉による簡単な模様を描いた製品も見られる。これらの製品群は沖縄県庁舎改築工事に先立つ涌田窯跡発掘調査以前までは、朝鮮陶工が伝えた製陶技術によって製作された製品と考えられていた。また、これらの製品群は沖縄県庁舎周辺から採集されることが多かったことや、朝鮮陶工が涌田で製陶に従事したという記録に基づいて、涌田焼とも呼ばれていた。

しかし、沖縄県庁舎改築工事に先立つ涌田窯跡の発掘調査によって、朝鮮陶工が伝えた製陶技術は施釉陶器ではなく、無釉の焼き締め陶器製作技法である蓋然性が高くなった。このため、灰釉碗に代表される施釉陶器の沖縄窯業史上の位置付けについては再検討の必要が生じることとなった。これを受け、家田淳一は中国南部地域で製作された粗製青花碗と灰釉碗との類似に言及している（家田1998）。家田は粗製青花碗について、日本本土では17世紀後半から18世紀前半に位置付けられる遺跡から出土することが一般的であるとしており、その年代は朝鮮陶工の來琉年代より後出する。これを踏まえ、家田は粗製青花碗の影響を受けたと考えられる灰釉碗の製作開始年代は17世紀後半以降に下降すると考えている。

また、新垣力はこの粗製青花碗について中国福建省漳州窯系染付（青花）碗とし、これが沖縄の遺跡調査事例では16世紀後半～17世紀代に比定されることを踏まえて、これを模倣したと考えられる灰釉碗の生産は17世紀前半に始まる可能性を指摘している（前出、新垣2000）。灰釉碗の成形にはロクロが使用されているなど、初期無釉陶器（無釉焼き締め陶器）との間には施釉技術だけでなく、製陶技術全般にわたる相違が認められる。このことからすれば、沖縄における灰釉碗については家田と新垣の考えに違いが見られた出現年代の確定とともに、製作技術の系統や沖縄への伝播過程に関する検討が必要となる。

このような研究状況の中、朝鮮陶工の來琉から400年となった平成28（2016）年の沖縄考古学会2016年度研究発表会では、琉球陶器誕生400年記念と銘打ったシンポジウム「16～17世紀の沖縄における窯業の展開とその背景」を開催した。研究会では石井龍太「琉球近世瓦の展開と琉球近世史」、新垣力「瓦質土器の製作技術」、渡辺芳郎「17世紀における薩摩焼製陶技術の琉球陶器への影響」、森達也「16～17世紀における中国陶磁の生産技術—窯構造を中心に—」の発表が行なわれている（沖縄考古学会2016）。

その中で、石井は琉球における瓦の展開過程を4期に区分し、第1期についてはその一例として那覇市渡地村跡出土の瓦を取り上げた。その上で、沖縄産であるかどうかの判別は今後の課題とするものの、これらの瓦を15世紀前半に比定するとともに、その製作技術が後の沖縄における瓦生産に継承された可能性に言及している。また、第2期とした16世紀以降については涌田窯跡の存在を上げ、瓦と瓦質土器（陶器）の胎土や焼成が近似していること、瓦質土器（陶器）の植木鉢に瓦と同種の牡丹文様を施した例が存在することを踏まえ、瓦と瓦質土器（陶器）では製作工人とデザイナーが近い関係にあったと述べている。

新垣は沖縄における瓦質土器（陶器）の器種構成を概観した上で、大型製品は粘土紐巻き上げ、小型製品は手捏ねを基本とし、ケズリとナデによって調整され、施文には縄目文突帯と瓦質土器（陶器）特有の円筒形施文具を用いて回転押捺文、線彫り文が施されることを特徴として上げている。そして、首里城跡や涌田窯跡の発掘調査成果からすれば、これらの瓦質土器（陶器）は16世紀後半には確実に存在し、その生産は16世紀前半にまで遡る可能性があることを指摘している。

渡辺は鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査した初期薩摩焼の窯である日置市堂平窯跡出土資料（鹿児島県立埋蔵文化財センター2006）と、新垣が紹介した沖縄出土の初期無釉陶器（無釉焼き締め陶器）および瓦質土器（陶器）（前出、新垣2013）を対象として、器種、形態、（製作）技法の比較検討を行い、沖縄で17世紀初頭に朝鮮陶工の來琉を図った目的は甕や大壺などの叩き成形で製作する大型器種の導入にあったと述べている。また、朝鮮陶工がもたらした製陶技術をそのまま受け入れるのではなく、以前から存在していた瓦質土器（陶器）との融合を図りながら、沖縄の需要に応じた器種や器形の選択を行なったとしている。

森は16・17世紀における中国の窯業生産で用いられた窯の構造について近年の研究状況を踏まえた紹介を行ない、同時期の中国福建・広東省の窯跡では陶器を龍窯（単室登窯）、磁器を横室階段窯（連房式登窯）で焼成する使い分けが行なわれていたことを指摘した。また、この使い分けは鹿児島の薩摩焼や沖縄壺屋焼の上焼と荒焼でも認められるが、沖縄での使い分けは中国からの直接的な導入ではなく、朝鮮半島や九州地域を経由した影響によるものと論じている。

4、問題の再確認

沖縄考古学会研究発表会におけるそれぞれの発表は沖縄窯業史研究に関する新たな情報を提供するものであった。これによって、本論の課題である沖縄における陶器生産のはじまりについても、問題の絞り込みが図られることとなった。

これまでの研究で明らかのように、現在の沖縄の窯業製品は瓦、荒焼、上焼の3つに大別される。それぞれの製品は製作技術が異なること、また外部からの技術導入によって成立したことが理解の基本となっている。このため、それぞれの製品を製作する技術の源流と沖縄への導入時期、さらには沖縄での定着化過程を明らかにする研究が進められてきたのである。

その結果、現在の沖縄で製作される瓦に繋がる製作技術については平窯を含む中国明代の製瓦技術が導入されたことが明らかである。石井によって製作開始年代が15世紀に遡る可能性も指摘されているが、考古学的調査によって資料的な裏付けができる確実な操業年代は17世紀前半に止まる。また、沖縄では瓦とともに瓦質土器（陶器）が製作されており、考古学的調査成果からすれば瓦質土器（陶器）は16世紀後半には使用されていたことが明らかで、新垣は16世紀前半にまで遡る可能性を想定している。したがって、瓦については涌田窯跡を含む旧那覇市街の遺跡や首里城跡などでの初期瓦例の再確認を進めることや、新たな調査の機会を設け初期瓦やこれを焼成した窯を確認することによって、初期瓦の型式学的編年研究と年代的位置付けの確定を行なうことが課題となる。これについては、瓦だけでなく瓦質土器（陶器）についても同様である。

次に現在の沖縄で荒焼と呼ばれる焼き締め陶器については、新垣や渡辺による初期無釉陶器と瓦質土器（陶器）との比較研究成果によって、文献記録に残る1616年とされる薩摩からの朝鮮陶工の来琉により単室登窯（筒窯）を含む初期薩摩焼無釉陶器技術がもたらされ、成立したことが明らかとなった。沖縄では朝鮮陶工の製陶技術と製作器種の中から沖縄の需要に適した壺や甕を中心とした大型製品を選択し、生産を開始した。この際、朝鮮陶工がもたらした製陶技術および器種と従前から行なわれていた瓦質土器（陶器）との融合が行なわれたことも明らかになった。今後は初期無釉陶器から現在の荒焼に至るまでの推移過程を焼成した窯構造の変化や製品の型式学的編年によって序列化することが必要である。

一方で、現在の沖縄では上焼と呼ばれる施釉陶器については、多くの未解明の問題が残されている。沖縄の施釉陶器の中で、もっとも早い段階に位置付けられていた灰釉碗については1616年に来琉した朝鮮陶工による製作とされたこともあったが、家田や新垣によって中国南部福建省漳州窯系粗製青花（染付）碗の影響を受けて成立したことが明らかとなった。ただし、その開始年代について家田は17世紀後半、新垣は17世紀前半としており、相違が見られる。また、灰釉碗にはロクロ成形技術と透明釉や鉄釉などの釉薬製作技術が伴っており、その技術系譜については未だ解明されていない。薩摩焼の初期窯跡である堅野系陶器には類似する技法により製作された製品が存在するが、沖縄の上焼との関係については類似するという指摘ができるのみで、具体的な関係を探る論考はほとんど見られない。沖縄の灰釉碗とその開始段階については今後の研究に待つところが大きい。

なお、この問題は沖縄において上焼を焼成した連房式登窯の導入経緯とも連動する。現在のところ、沖縄への連房式登窯の導入は18世紀前半と考えられているが、薩摩焼では1630年代に肥前から導入されたことが知られており（田沢・小山1941）、沖縄における導入も17世紀代に遡る可能性は否定できない。灰釉碗から上焼への展開過程を含めて、連房式登窯の導入年代についても再検討の俎上に上げることが必要であると考えられる。

以上、沖縄における陶器生産のはじまりについて、現在の研究状況を概観した上で、今後に残された問題点の抽出を行なってみた。中には、筆者の勉強不足と理解能力不足により、偏った部分もあると考えられる。そのような点については、多くの研究者のみなさんが新たな研究を積み重ねることによって、筆者の誤認を糾していただきたいと思う。それによって今後の研究の進展が図られれば望外の慶びとすることである。

最後に、本文の執筆の機会を与えていただいた那覇市壺屋焼物博物館に対して厚く御礼申し上げます。

註

1、『琉球国由来記』については、伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編「琉球国由来記」『琉球史叢書』第1（井上書房）を参照した。陶工に関する記載は次のとおりである。

『琉球国由来記』巻4「事始 坤 技術門 49 陶工」

「當國陶始者、萬曆四四年丙辰、尚豊王 為佐敷王子時、渡御于薩州。其時、高麗人一官・一六・三官云、三人之者、御召列御帰国也。本国之于人教陶。

一官・三官者、甕府ニ帰国。一六者本国滞在、為居住、結片髪、仲地名付。其子孫、今泉崎涌田、崎山云人也。此故當國陶之始、称高麗焼也。・・・(後略)」

2、1970年以降、沖縄の焼物についての主な出版物には下記のものがある。

①宮城篤正「沖縄の陶器」『世界陶磁全集』7（江戸Ⅱ）小学館 1970年

②濱田省司監修『沖縄の陶器—OKINAWAN POTTERY—』琉球電信電話公社 1972年

③大城精徳・宮城篤正「古我知焼」『琉球の古陶』1 琉球文化社 1972年

④「特集・琉球の焼物」『琉球の文化』創刊号 琉球文化社 1972年

⑤外間正幸・宮城篤正「沖縄」『カラー日本のやきもの』1 淡交社 1974年

⑥立原正秋・林屋晴三監修「薩摩・壺屋」『探訪日本の陶芸』1（南九州・沖縄）小学館 1980年

⑦上江洲均「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺 歴史・民俗篇』国分直一博士古稀記念論集編集委員会編 新日本教育図書 1980年

⑧満岡忠成「沖縄」『日本やきもの集成』（九州Ⅱ）平凡社 1982年

⑨井上靖・吉田光邦監修『やきもの大百科』3（九州・沖縄編）ぎょうせい 1990年

3、窯跡採集資料に基づく主な論文には下記のものがある。

①安里進・上原政昌・家田淳一「播鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『あじまあ』3名護市立名護博物館 1987年

②知念勇・池田榮史・江藤和幸「灰釉碗からみた近世沖縄古窯の編年」『沖縄県立博物館紀要』第14号 1988年

③池田榮史・津波古聡「灰釉碗の話」『沖縄県立博物館紀要』第17号 1991年

4、註1の『琉球国由来記』巻4「事始 坤 技術門 35 瓦工」に下記の記述がある。

「當國瓦作、焼始年代不詳。往昔唐人渡来、而真和志間切于国場村居住、同間切於真玉橋村焼始也。于御檢地帳、渡嘉敷三良云、賜此地也。」

5、沖縄で確認される窯の名称について、筆者は1995年の論考において、瓦窯については「平窯」としたが、中国では一般に「饅頭窯」と呼ばれている。また、瓦と焼き締め陶器を焼成した単室登窯については「蛇窯」と呼ぶ磁器窯の構造や、韓国で発掘される高麗青磁や朝鮮磁器の窯跡の構造との類似を念頭に置いて仮に「筒窯」と呼称した。このため、本稿ではこれと呼ぶ場合「単室登窯（筒窯）」と表記している。なお、上焼を焼成した連房式登窯については日本の窯業史研究で用いられている「連房式登窯」をそのまま用いた。その上で、連房式登窯が沖縄へ導入された年代は18世紀前半とした。

参考文献

新垣力

2000 「モデルとコピーの視点からみた窯業開始期の沖縄」『南島考古』第19号 沖縄考古学会

2013 「17世紀前半～中葉の琉球陶器について―「初期無釉陶器」にみる薩摩焼の影響―」『鹿児島考古』第43集 鹿児島県考古学会

家田淳一

1998 「沖縄のやきもの―概説―」『平成10年度企画展 沖縄のやきもの―南海からの香り―図録』佐賀県立九州陶磁文化館

池田榮史

1995 「琉球近世窯業史考―窯構造の検討―」『琉大アジア研究』創刊号 琉球大学法文学部附属アジア研究施設

石井龍太

2007 「涌田古窯の再評価―涌田古窯跡の軒丸瓦―」『南島考古』第26号 沖縄考古学会

2008 「涌田古窯の再評価―涌田古窯跡の軒平瓦―」『南島考古』第27号 沖縄考古学会

2009 「涌田古窯の再評価―涌田古窯跡の瓦質土器製植木鉢―」『南島考古』第28号 沖縄考古学会

上原静

1994 「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』第14号（学会創立25周年記念特集号）

2007 「琉球王国における瓦窯生産の画期と展開」『南島文化』第29号 沖縄国際大学南島文化研究所

2008 「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」『総合学術研究紀要』第11巻第2号 沖縄国際大学学術学会
沖縄県教育委員会

1993 「涌田古窯跡（Ⅰ）―県庁舎行政棟建設に係る発掘調査―」『沖縄県文化財調査報告書』第111集

1995 「涌田古窯跡（Ⅱ）―県庁舎議会議堂棟建設に係る発掘調査―」『沖縄県文化財調査報告書』第121集

1997 「涌田古窯跡（Ⅲ）―県庁舎警察棟建設に係る発掘調査―」『沖縄県文化財調査報告書』第129集

1999 「涌田古窯跡（Ⅳ）―県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査―」『沖縄県文化財調査報告書』第136集
沖縄考古学会

2016 「（琉球陶器誕生400年記念）16～17世紀の沖縄における窯業の展開とその背景」『沖縄考古学会2016年度研究発表会資料集』

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2006 「堂平窯跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（106）（南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XIX）

瀬戸哲也

2004a 「沖縄出土の本土系瓦質土器」『グスク文化を考える』（世界遺産国際シンポジウム〈東アジアの城郭遺跡を比較して〉の記録） 沖縄県今帰仁村教育委員会

2004b 「本土系瓦質土器の産地についての試論―北部九州の瓦質土器と比較して―」『紀要沖縄埋文研究』第2号
沖縄県立埋蔵文化財センター

2009 「南の境界・琉球の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究』22 日本中世土器研究会

田沢金吾・小山富士夫

1941 『薩摩焼の研究』座右寶刊行會（1987（昭和62）年に国書刊行会より復刻）

那覇市立壺屋焼物博物館

2011 『沖縄県立博物館・美術館×那覇市立壺屋焼物博物館合同企画展 琉球陶器の来た道』図録
東恩納寛惇

1941 『黎明期の海外交通史』帝国教育会出版部（後に琉球新報社が1969年に再版）

やちむん会

1979 「図録沖縄の古窯」『やちむん会10周年記念『やちむん』特別号』

山里永吉

1963 「南蛮焼」『壺中天地一裏からのぞいた琉球史一』琉球文庫